

## HTLV-1 母子感染に関する研究及び予防対策

川 名 尚\*  
佐 藤 洋 一\*

要約：1977-1979年の東京大学産婦人科の妊婦血清中のATLA抗体の検索を行い9名が陽性であった。これらについてprospective studyを行うことにしている。妊婦血清中のATLA抗体の検索を開始した所、P A法、W B法で抗体陽性であったにも拘らず抗原検出は陰性で、これらの方法に問題があると考えられた。

見出し語：HTLV-1母子感染、prospective study、妊婦血清中のATLA抗体測定法

### I、HTLV-1母子感染に関する研究

#### 研究方法：

(1) 1977-1979年に東大産婦人科にて分娩した妊婦のうち現在、保存中の血清737検体に対してゼラチン粒子凝集法(P A)によりATLA抗体の検索を施行し、陽性の検体に対してはE I A法、Western Blot(W B)法を確認試験として施行した。昭和62年10月より東京大学産婦人科、及びその関連病院の産科にて、定期検診中の妊婦血清中のATLA抗体の検索をP A法にてスクリーニング後、W B法を確認試験として施行し、陽性と判定した妊婦の分娩時の母体血、

#### 結果：

臍帯血よりリンパ球の分離、培養を施行し、HTLV-1抗原の検索を施行した。

(1) 737検体中P A法により抗体の陽性者は14検体、13名(1.9%)であった。このうち、E I A、W B法にて確認試験を施行して陽性と判定した検体は10検体、9名であった。これら9名より分娩した児についての追跡調査を行う予定にしている。尚、輸血歴のあるものが3例あった。P A法では4検体が false positive であったと考えられる。false positive rate は、約 0.6%であった。

---

東京大学 医学部 分院産婦人科学教室  
( University of Tokyo )

(2) PA法、WB法にて、抗体陽性と判定された3検体に対して出産時の母体血、臍帯血を採血して間接蛍光抗体法（IF）にて抗体と抗原の検索を施行した。

結果、WB法にてIgM抗体陽性等の判定をされた妊婦の出産時の母体血と臍帯血に対し、PA法を施行した。

母体血液中の抗体は64-128倍となったが、同時に採取された臍帯血に抗体は検出されなかった。

一方、母体血、臍帯血からリンパ球を分離、インターロイキン2で培養して抗原の検査をIF法にて施行した。その結果はすべて陰性であった。この結果から、今回陽性と判定されたPA法、WB法がfalse positiveであった可能性はかなり高いものと考えられた。

考察：今回の例では、母体血中にて検出された抗体はIgM分画にあると考えられた。WB法にて、IgM抗体のみしか検出されなかったこと一致する。HTLV-1のキャリアがIgM分画の抗体しかもっていないということは常識的に考えにくいことである。

現在、経母乳母乳児感染対策を目的として、妊娠中のHTLV-1抗体検査の施行が一般化されつつあるが、種々の検査法の中で確認試験として最も信頼性の高いと考えられているWestern Blot法にすら、使用抗原の状態等により、判定を誤る要素があることがわかった。母親が母乳哺育できないことは、はかりしれない精神的苦痛を伴うことを考えるとこのような検査方法の誤りは重大な問題である。

今後は、

(1) PA法で判定を陽性とする際の抗体価の基準の設定。

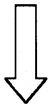
(2) 現在、確認試験として用いられているWB法によるIgM抗体の検出の臨床的意義を明らかにする必要がある。

## II、HTLV-1母子感染予防に関するガイドライン作成のための準備

HTLV-1の感染経路としては、輸血による感染、性行為感染、母子感染があるが、輸血による感染に対する対策は既にたてられ実行に移されている。次に、母子感染に関する対策であるが、経母乳感染が主な感染経路であることが本研究班の研究によって明らかにされているので、授乳を中止することにより母子感染を防止することが可能になった。

ATLの原因となるHTLV-1の母子感染を防ぐと共にHTLV-1の日本民族からの排除という広大な目的のために国家的なレベルで母子感染予防事業を行うことも考えられるようになった。しかし、この点について、学問的、家庭的、社会的な幾多の問題を解決する必要がある。今回は、これらの諸問題をまとめてみた。一部については現状においてはどのような考え方に立つのが妥当かを班員全体で討論した。

今回は、時間的にも十分でなかった上に、検査法の問題、地域性に関する問題などは、未解決なもの多く、来年度に大きな課題を残すことになった。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1977-1979年の東京大学産婦人科の妊婦血清中の ATLA 抗体の検索を行い9名が陽性であった。これらについて prospective study を行うことにしている。妊婦血清中の ALTA 抗体の検索を開始した所、PA 法、WB 法で抗体陽性であったにも拘らず抗原検出は陰性で、これらの方法に問題があると考えられた。